

東日本大震災の発生以後、岩手県、宮城県、福島県を訪れる中、現地の人たちに「ここまでわざわざ来てくれて本当にありがとう。とてもうれしい。どうか、ここであなたが経験したこと、見たこと、話をしたことをあなたの住む町に帰って一人でも多くの人に話をしてほしい。私たちのことを忘れないでいてほしい」と話をしてくれてから、活動したことをどう人に伝えていくか、一人でも多くの人に東日本大震災のこと、そこに暮らす人たちの想いに寄り添ってもらえるにはどうしたらいいかを考えながら活動してきました。そのような中でこの校友会の復興支援事業では現地を訪問し、レポートを作成することになっているため、多くの校友会の皆さまに福島の今を知っていただけの機会につながると思い、応援ツアーに参加させていただきました。

私が福島にいた時間は、震災後5年8か月と1日の中のみわずかな時間のことではありますが、そこに暮らす方々のこと、福島の今を伝えたいと思います。そして、このツアーの実施について多大なるご尽力をいただいた皆様方に深く感謝いたします。

現地ツアーの前日、福島は雨。気温も低い中、私はレンタカーを借りて郡山から浪江町に向かって国道288号線を走らせました。どうしても自分でも色々なところを見ておきたいという思いが強かったからです。道中、車窓から見える山々の紅葉は秀逸で、思わず車を道路脇に停めて、見とれてしまうほどでした。しかし、田村市を越える辺りから道路脇には「立ち入り禁止」の看板が並び、住んでいない家がぼつぼつと見られ始め、雨模様だったこともあり白いカップ姿の作業員や警備員の方が増えてきました。今まで訪れた場所では見たことのない風景に、福島が置かれている状況の困難さの一端がわかったような気がしました。

前日の何となく寂しさや悲しさをまとった天気から一変し、ツアー当日は晴天に恵まれ、バスも浪江町を目指して、常磐自動車道を北上していきました。車窓からは、普通の暮らしの風景に混じって、モニタリングポストにおける放射線量の測定結果が表示されていたり、除染作業で出た放射性廃棄物を詰めた黒い袋（フレコンバッグ）が並べられていたりする景色が見られました。

浪江町に到着すると、本間副町長様がバスに同乗し、町の現状と課題について話をしてくださいました。震災直後、政府からの支援や指示がなく町民がバラバラに避難したことにより、その後のコミュニティの形成が難しい中での、復興まちづくりを考え実行していくのはとても大変な道のりであると感じました。また、大平山から見た請戸漁港周辺の津波被災地は、これまで自分が見てきた他の被災地と比較しても、ほとんど手付かずの状態でした。しかし、数年後にはその場所が交流・情報発信拠点や産業団地などができる計画があると話をくださり、目の前に広がる風景がこれからどんどん変わっていくのだと胸が高鳴りました。

そして、浪江町中心市街地を歩くと、通行する車は少なく、家主の帰りを待つ家々が立ち並び、時間が止まったような景色がありました。ガソリンスタンドから店員の女性の方の「いらっしゃいませ！」「ありがとうございました！」の元気な声が響き、役場の隣にできた「まち・なみ・まるしえ」でもお店の人たちが元気に迎えてくださり、



さらに町の人たちが交流できる場もでき、活気が生まれ始めていることを強く感じました。

続いて、かつてジーコ J A P A N がドイツ W 杯の最終合宿を行い、その様子がテレビでも連日放送されていた J ヴィレッジに訪れました。福島第一原発から約 20 キロの距離にあり、震災後は原発への対応の最前線基地となり、多い時では、自衛隊の方や原発作業員の方 3000 人が寝泊まりをし、その後 1 日 7000 人の作業員の方がこの場所を起点として原発に向かっていたというお話を施設の方から伺いました。TV から流れる白い作業服に着替えたたくさんの方がバスに乗り込んで原発に向かう映像は衝撃的で、同じ日本で行われていることとは思えませんでした。施設の方が「原発事故が起きなければこのようなこのようなことになることはなかったけれど、これだけの施設があったからこそ、皮肉ではあるが原発事故への対応が円滑にできたのではないかと話されていたことが



とても印象に残っています。全国から数多くの合宿を受け入れ、サッカーを大好きな子どもたちの声が響き渡るグラウンドには、車やバスが駐車されているこの場所にまたたくさんの方が訪れる場になってほしいと思いました。2018 年には一部再開、2019 年春には本格再開をし、2020 年の東京五輪の日本代表合宿地にも決まり、これからの J ヴィレッジの復興を見守りたいと思います。

その後、いわきのいわき湯本温泉に移動し、福島大学長で校友の中井勝己様から、「福島の震災復興と未来～大学（立命館大学・福島大学）との関わり方～という演題で講演いただきました。福島の震災の現状と取組について話をしてくださり、福島大学が復興支援の大きな柱となり、放射線に対する研究に加えて、コミュニティの再生や子どもたちへの支援といったソフト面の支援も行っており、その中で学生の皆さんが地域コミュニティの中うまく入っていき、地域の方たちの心の支えになったり、様々な取り組みを行っていたりすることを知りました。これからの福島の復興のためには福島大学の存在がますます大きくなっていくのを感じずにはいられませんでした。

その後、いわきのいわき湯本温泉に移動し、福島大学長で校友の中井勝己様から、「福島の震災復興と未来～大学（立命館大学・福島大学）との関わり方～という演題で講演いただきました。福島の震災の現状と取組について話をしてくださり、福島大学が復興支援の大きな柱となり、放射線に対する研究に加えて、コミュニティの再生や子どもたちへの支援といったソフト面の支援も行っており、その中で学生の皆さんが地域コミュニティの中うまく入っていき、地域の方たちの心の支えになったり、様々な取り組みを行っていたりすることを知りました。これからの福島の復興のためには福島大学の存在がますます大きくなっていくのを感じずにはいられませんでした。

このツアーを通じて、改めて原発・放射線の影響が大きく影を落とす福島の復興は他の地域と違う苦しさで大変さがあると痛感しました。ですが、そこで懸命に復興に向けて励んでいる人たちの姿も知ることができました。だからこそ、福島のことを他人事にはいけないのです。震災から 5 年が経過すると、徐々に報道されることが少なくなり、さらに復興に向けた話題が多くなっていきます。ですが、福島の復興はこれから、国民一人一人がその痛みを感じながら、現状を知る努力を忘れず、福島の方の心に寄り添いながら復興を応援していかなければなりません。ツアー中、「福島が復興した」というのはどうゆう状況なのだろうと考えていました。その道のりが長く険しいことは間違いありません。このことを常に考えながら、これからもできることを続けていきたいと思っています。一過性のものでなく続けていくこと、このことが大切であり、このツアーが私にとって新たなスタートラインとなりました。都合により短期間で参加になりましたが、大変貴重な時間を過ごすことができました。最後になりましたが、このようなツアーを運営してくださった方々、受け入れに尽力してくださった福島県の校友会の方々に深く感謝いたします。